

読書通信



No. 176

① 愛国という言葉や行動ほど厄介なものはない。ヘイトスピーチも領土拡張もそうした旗のもとに展開される。ナシヨナリズムも怖い。イデオロギーよりナシヨナリズムこそ警戒せよと半世紀以上前に喝破したのは石橋湛山だった。

将棋面貴巴『日本国民のための愛国の教科書』（百万年書房、1848円）は永く海外から日本を見てきた著者が、国を愛する、国を誇りに思う、国のために尽くす、などさまざまな角度から論じている。特に「愛国」をナシヨナリズムナショナリズムのそれと共和主義的それとに峻別することを

提起しているのは重要である。前者は国の冷静な評価を怠り溺愛するが、後者は短所もきちんと見極める。そして群れる前者に対し、後者は一人でも立場を貫けるとする。至言だろう。ほかにも教えられることが多い。分量的にも、気軽に手に取れる貴重な一冊である。

② 語り尽くされたはずの2・26事件だがまだまだ新たな切り口から書かれ続けるのだろう。文芸誌に連載された5つの短編からなる中路啓太『昭和天皇の声』（文藝春秋、1760円）は、永田鉄山軍務局長を斬殺した相沢三郎中佐の話から始まる。2話は事件で射殺されたと信じられた岡田啓介総理の救出劇を軸とし、3話は鈴木貴太郎侍従長を身を挺して守った妻たか、とどめを刺さなかった安藤輝三大尉、その部下の

三つ巴が主題で、ともに皇道派と統制派の対立がからむ。4話は田中清玄せいきんと怪僧玄峰が主役で、最後の話では昭和天皇が専制君主と立憲君主の狭間で苦悩する。どれも余韻十分で読後感のいい秀作だ。16年5月号本欄で取り上げた同じ著者の『ロンドン狂瀾』と併せて推薦したい。

③ 非行少年なんて関係ないという人が多いかもしれないが、非行少年がなぜ生まれるかはとても重要である。多くは小学2年次から授業についていけなくなり、中学で非行に走る。こうした実態と対策を見事に提示したのが宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』（新潮新書、792円）で、ただし対応しだいで彼らは救われうるという。基礎学力と認識能力が低いまま歳をとっていく少年たちの悲劇は書名（円いケ

ーキを三等分できない）に象徴されている。少子化を心配するよりも、彼らを救うほうが先だと痛感する。そして彼らの衝動と非行は町の人にも起こりうることで、人ごとではない。

④ ナポレオンやヒトラーの軍勢がロシアの厳冬に兵站線を千切られて潰滅状態となったことは有名だが、木元寛明『気象と戦術』（サイエンス・アイ新書、1100円）は戦争と気象の関係を丁寧に説明していく。戦争は、多く気象条件を生かしたほうが勝利している。ロシア、ベトナム、中東、ガダルカナル、マレー、さまざまな地理的条件のもとでの予想もしなかった気象に軍隊が翻弄されるのには歴史のイフを感じさせられ、気象好きにも作戦好きにも楽しめるだろう。著者は自衛隊元陸将補。（浅野 純次）